

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 KIM Bawoo

論 文 題 目

The Path of Trade and Economic Development in East Asian Countries  
(東アジア諸国の貿易と経済発展)

### 論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 藤川清史  
委員 名古屋大学 教授 梅村哲夫  
委員 名古屋大学 准教授 新海尚子  
委員 韓国産業研究院 主席研究委員 李鎮勉

# 論文審査の結果の要旨

## 1. 論文の概要と構成

この学位請求論文は、日本、韓国、中国の東アジア 3 か国の貿易構造を理論的・実証的な観点から分析したものである。この 3 国は、いわゆる雁行形態的な発展パターンを取った国として知られるが、著者は韓国の研究者であり、韓国にとって日本と中国は重要な貿易パートナーであることから、この 3 国を分析対象とした。一国の貿易パターン(とくに輸出パターン)およびその変化は、経済発展の水準を映す鏡ともなる。また、過去の貿易構造の変化を知り、現在の貿易構造を理解することは、今後の経済政策担当者の政策立案の重要な資料になる。

この論文の具体的な目的は、次の 3 つである。

- 1) 韓日中の輸出構造の変化は、外延的か内延的かを検討する。外延的とは輸出の相手国や品目が増加すること、内延的とは現在の相手国や品目により集中することである。
- 2) 韓日中の輸出高度化の程度を測定するために、2 国間の輸出構造の類似性を検討する。
- 3) 中国が韓国・日本等と行っている来料加工貿易が中国の貿易構造の変化に及ぼす影響を検討する。

第 1 章では、日本、韓国、中国の東アジアの 3 か国の経済・貿易構造の推移を概説し、上記の論文の問題意識・目的の説明があった。

第 2 章では、東アジア諸国の輸出の拡大のパターンについて検討した。貿易の外延拡張とは、貿易国数や貿易品目数が増加することで、貿易の内延拡張とは、貿易相手国 1 国当たりの貿易額や 1 品目当たりの貿易額が増加することである。ハメルズ・クレノウ(2005,AER)は外延が輸出拡大の主要要因であると主張したが、ヘルプマン他(2008,QJE)は内延が輸出成長の原動力であると主張した。輸出拡大の主要要因が外延であるか内延であるかは貿易研究者の間で論争になっている。本論文では、日中韓の輸出が外延/内延のどちらを中心に成長してきたのかを分析した。その結果、3 国とも内延が重要な要素であることがわかった。ただし、中国の輸出増加の原因としては、輸出相手国の多様化(外延)と輸出品目の集中(内延拡張)という両面の要素があることもわかった。

第 3 章では、2 国間の貿易構造の類似性について検討した。グルーベル・ロイド指標(1975,Wiley)、フィンガー・クレインイン指標(1979,EJ)等は、貿易構造がどの程度類似しているかの指標(輸出構造類似度指標)を提案している。本論文では、既存の輸出構造類似度指標の特徴と問題点を指摘し、そのうえで距離を表す指標であるミンコフスキー指標を応用し、輸出財の品質も考慮した輸出構造類似度指標を提案した。その結果、中国と日本、あるいは中国と韓国の類似性は、品質調整を行わない場合は類似性が高くなってきているが、品質の調整を行うと類似性がかなり低くなることが分かった。

第 4 章では、先進国企業から途上国企業への技術伝播モデル(ハウスマンモデル・モデル)を改良して、中国の来料加工貿易の国内経済への効果について分析した。このモデル

## 論文審査の結果の要旨

は直接投資による現地企業への技術伝播を評価するモデルであるが、筆者はこれを来料加工貿易に応用した。加工貿易がその国の輸出競争力にプラスの効果があるかマイナスの効果があるかは議論の分かれているところではあるが、筆者の推定では、中国に関して品目別の輸出を追ったところ、来料加工貿易から通常貿易に移る傾向がみられ、プラスの効果が確認された。

第5章では、以上の研究結果から、韓国の輸出拡大は「内延」が主要因であり、輸出財の「寿命」も短くなる傾向がある以上、製造業での雇用確保には限界があることを指摘し、第3次産業での雇用の拡大が期待されること、および貿易の拡大方向に関しても技術力の高い中小企業を支援するなど「外延」にも力を入れるべきであるとする等の政策提言を行った。

以上のように、本論文は、日本、韓国、中国という東アジアの3か国を対象にして、その貿易構造の特徴および類似性を集計量として把握しようとした意欲的研究である。

### 2. 評価

本論文は、以下の諸点で評価される。

- 1) 国連の国別品目別貿易データを丹念に検証することで、韓国、日本、中国およびその貿易相手国の貿易構造の変化を検証したこと。また貿易の拡大は内延が主要因であることを確認した点。
- 2) 二国間貿易の類似度の指標として、従来型の指標の問題点を指摘し、改良型の指標を提案した点。
- 3) 中国の行っている来料加工貿易に対しては、プラスとマイナスの評価が分かれているが、品目別貿易データの変化から、来料加工貿易から通常貿易に移る傾向がみられ、プラスの効果が確認された点。

一方で、本研究には次のような解決すべき課題もある。

- 1) この研究で利用した貿易データは年次データであるが、とくに貿易財の「寿命」を推計する際は、期種の短い(四半期、月次)貿易データを用いることが望まれる。
- 2) 距離を表す指標であるミンコフスキー指標にはいくつかのパラメータがあるが、この研究では、それらの値の妥当性についての議論が深められていない。
- 3) この研究では、中国の来料加工貿易の効果についての研究は通関データをもとに行ったが、中国の研究者が行っているように企業レベルのマイクロデータを使って検証を行うことも考えるべきであろう。

ただし、これらの改善は、著者が今後の研究活動の中で行なうべき将来的研究課題であり、本論文の博士論文としての価値を損なうものではないと考えられる。

### 3. 結論

以上の評価により、本論文は博士(国際開発学)の学位に値するものである。